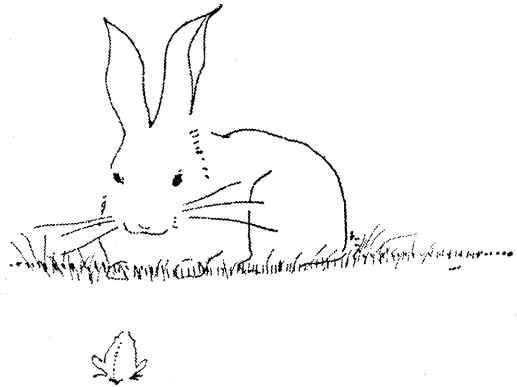


大人・子ども・コトバ

「ウサギの子殺し」をめぐって―

森下 みさ子



保育観察の機会は、時として「保育」という甘やかな

大人と子どものかかわりから見落とされがちな子どもの一面を、衝撃的なまでに垣間見せてくれることがある。

次に記す一例も、「大人と子ども」をめぐって、また「子どもとことば」をめぐって、私にいくつかの問いを投げかけることになった忘れがたい事象である。

「ウサギが赤ちゃん食べてる!!」

園庭を歩いていると、突然こんな声がとびこんできた。見ると、ウサギ小屋のあたりには、七、八人の子どもが蠢いている。「赤ちゃん殺し!!」と叫んで、興奮しきった赤い顔をして走り出ている子がいるかと思うと、「えーっどれ!!」と、遊びを途中でやめて駆けこんでゆく子もいる。小屋に近づいてみると、押し合いへし合

い、身をよじらせながら、額を小屋のガラスにくっつけて、よく見ようと皆懸命である。「あーっほらーっ」と子どもが指さす先を見ると、白地に黒い斑点の大きなウサギが、うずくまったまま口をもぐもぐ動かしている。

その口の先のワラの中には、薄いピンク色をした小さな塊があり……目を凝らしてみると、フニョフニョした生まれて間もないウサギの赤ちゃんである。お腹のあたりがへこんでおり、もはや息は絶えている。大きいウサギがちょうど赤ちゃんウサギのお腹のところまで口を動かしているのが、まるで食べているように見える。「トンマ、トンマー」とM子が叫んで拳をふりあげる。それを機に「でたー!!」「人殺しー!!」と叫びながら駆け出してゆく子がいて、固まって蠢めていた黒い頭がパッと散り、あたりは騒然となる。M子が興奮さめやらぬ面持で、頬を赤らめ息を荒げながら、「産んだ おかあさんが、生んだ 子どもを 食べてる」「産んだ おかあさんが、生んだ 子どもを 食べてる」と、一語一語区切りながら、かみしめるようにくり返す。観察に来ていた

学生の一人が、やはり騒ぎを聞きつけてやってくると、M子はやや得意気に大きな声で「あのねー、おかあさんウサギが赤ちゃん食べちゃったんだよ」と説明する。その後すぐ眉をひそめ、さも哀れんでいるような表情で「かわいそー」と付け加える。学生がオズオズしながら「死んじゃったから、じゃないの?」とM子に尋ねると、M子は「ちがう!!生きてたの!!」ときっぱり。学生が今度は「なめてあげてるんじゃない?」というと、「ちがう食べてんだよ!!」と、これまた憤然とした面持で語気も強くい切る。その後M子は、また「かわいそーに」と付け加えると、「みんなに知らせてこよーっと」と、走り去っていった。

このような一事象を通してまず気づかされることは、私たち大人が常日頃「子ども」をどのようなものとしてとらえようとしているかであろう。私たちにとって子どもは、日々成長をとりげいきと活動する。存在そのものが限りなく「生」を謳歌し表現するものであるらし

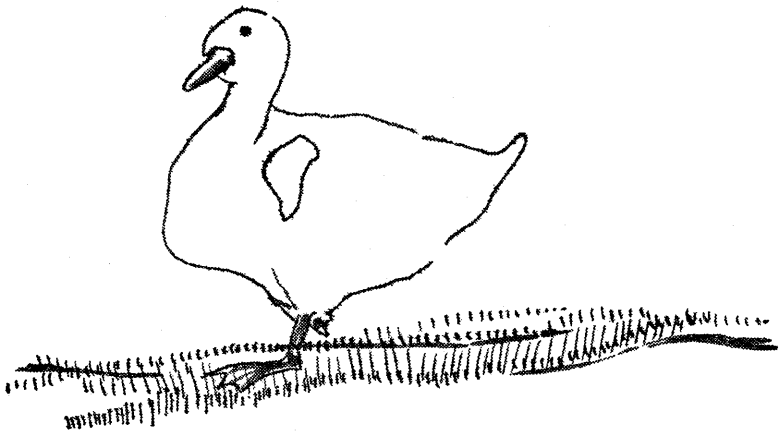
い。「保育」という営みはことさらに、子どもが健やかな生を生きることができるよう細やかな配慮を惜しまない。小動物の死といえども、「死」は保育の場に余程気をつけて持ちこまねばならない。ましてそれが一種の殺害、さらには養い養われる関係の根幹に位置づく母子の間で、母親が子どもを喰い殺すような形で示されることには、不安と嫌悪を感じるのが当然といえよう。観察の学生のM子への問いかけには、そうした大人の側の動揺と、なんとかタブーから子どもを離し「生」を媒介とした穏当な大人と子どもの関係を回復しようとする焦りがある。ところがM子は、そんな大人の側の働きかけを容赦なく切り捨て、タブーの側に身を寄せる。「赤ちゃんが死んだから母親がなめてあげている」という、学生から与えられた解釈を「ちがう!!」と否定し、あくまでも「母親が殺して食べている」と主張して譲らないのだ。ここで私たちは、大人が子どもに着せたがる大人しやかな衣装と裸のままの子どもとのずれに、そしてまた大人と子どものどうしようもなく相克しあう関係に気

づかされる。実際には、母親がどうか定かでない大きなウサギが死んだ赤ちゃんウサギのそばで口を動かしているにすぎないのだから、大人と子どものどちらが事実をいいあてているのかはわからないし、それはどうでもよいことであろう。ここではM子が、母親が子どもを食べるという見え方の方に自分の足場を求め、そこから大人への発言をくりだしていることにこそ目を注ぎたい。

「母親なるもの」が産む存在であると同時に、子どもを呑みこみ再び体内にとりこもうとする恐るべき力の持主でもあることは、「太母^{グレートマザー}」という名称を与えられて指摘されてきたことである。生命の産出と吸収を司る巨大な力の主体として「母親」は、その両義的なかわりを、神話・文芸の上に、臨床事例の上に、数限りないしるしとしてとどめてきた。しかしそれは、極めて原初的で、いくつもの文化的なとりきめによって秩序を型づけている日常の社会においては、事例や文芸といった特別な場を借りてとり扱われる以外は、タブー視されるような危険性をたっぷりと抱えこんだ存在でもある。そも

そも母体が新しい生命を産み、守り育て、社会に送り出し、やがてその生命が再生産を行なうという形で社会が存続しているのであってみれば、母体に秘められた同じ力が全く逆の方向に奔流するものでもあると認めることは、社会を根底からくつがえし破壊することに他ならないのだから。

ところがM子は、この力の所在に何と敏感に反応し、それを頑固に主張し続けたことか……。このとき私たちが知らされるのは、「子ども」は、社会的な約束事や文化的な型が覆い隠してしまふ、生命の産出も破壊も同時におこりうるような力の場に、より身近い存在であるということだ。大人は、子どもの裡に目覚めたそんな力に気がつくとすぐさま、こうした秩序からはみ出る力をとどめ、自分たちのよって立つ基盤である文化的・社会的な解釈の型に流しこもうとするけれど、力の奔流を感知した子どもの言動は、簡単にはひるがえらない。こうして「子ども」は、人間にとって原初的・根源的で、それゆえに秘匿される力のありかを告げる者となり、同時に



秩序社会に立つ「大人」への果敢な挑発者ともなるのである。

ところでこの場合M子のことばに着目すると、M子自身の中で興味深い揺れが生じていることがわかる。最初M子は事象を衝撃的に受けとめ、ほとんど狂乱的に「トナー」ということばをぶつけている。このときM子は、日常社会ではあつてはならないことが目の前で生じているのを鋭敏に感じると同時に、そのこと自体にショックを受けている。そこでM子のことばは事象におおいに触発されながらも、秩序社会の側から事象を打ち消すような形で投げかけられている。ところが一時の騒乱を経て、M子はまだ興奮はしているものの、極めてしっかりした口調で「産んだ おかあさんが、生んだ 子どもを 食べてる」とくり返すという。目の前の生々しい事象を、今度は明晰な文章にして、しかも一語一語区切りながら口にするのだ。

私たちはここで、ことばが大変おもしろい働きをしていることに気づかされるのではないだろうか。M子のか

みしめるようないい方からして、ことばが起こっている事柄をくっきりとした形におさめる働きをしていることは明らかであろう。目に映じた衝撃的なでき事を衝撃のままに放置するのではなく、ことばの配列の中に封じこめ、そこに意味をもった一連なりの文章をつくりあげている。これによって、どうにでも解釈できる、それだけにわけのわからない衝撃が身体を突きぬけてゆくような事象は、「産んだ母親」が「生んだ子ども」を「食べている」という、ことばの連鎖の中にカチリとおさめられるのだ。生々しい事象との間には距離が置かれ、事象が放っていた迫力はその分薄められる。しかし同時に、他どの解釈も入りこむ余地のないゆるぎなさをもって事象は説明されることになる。しかもその中身は、先に触れたように相当危険な意味を抱えている。そこでM子がこのようなことばを口にした途端、M子が事象から直かに感じとっていた衝撃力は弱まるけれど、今度は「ことば」の上で意味を明確にした衝撃性が生じてくる。事象そのものの衝撃性からことばの上での衝撃性……。M子

はことばによって、一方では生々しい事象から遠ざかりながら、もう一方では事象に意味を与え、伝達し、周囲に衝撃的な波紋をおこす役割を受け持つのである。

ここでさらに興味を惹くのは、そういいながらもM子がさも哀れんだ口振りで「かわいそー」と付け加えていることである。先ほどの挑発的なことばとは異なり、これは、失われた生命に同情を寄せるといふ、大人の側からも納得のゆく社会的な態度と映る。こうしてM子は、大人との関係を切って、大人がタブーとする事柄を表面化してみせるが、同時に大人のよって立つ社会的な基盤との間に橋をかけようとする。切断しつつ関係をとりもとうとする、その狭間で「ことば」は二つの役割を鮮やかにとりもっているといえよう。

ここには、「大人・子ども・ことば」の三者が織りなす興味深い関係の切り口がのぞいているように思われる。子どもはことばを獲得することによって社会にくみいれられていくけれど、同時に子どもの感覚はことばの力を借りて表出され、大人に対する挑発性を露わにす

る。しかもその際即座に大人との関係をとり結ぼうとするのも、これまたことばの働きなのである。M子のことばが表わしているのは、秩序と反秩序の間で、大きな衝撃を感受しつつ揺れ動いているM子の心である。が、見方を変えれば、M子はことばを操作することによって、狭間の位置で巧みに舵をとっていると考えることもできよう。

秩序の側でもなく反秩序の側でもない、両者の間を往き交う流れの中で、ことばを頼りにバランスをとりつつ大人との関係をつけてゆく子どもの存在の仕方を、この小さな事例が鮮やかに描き出しているように思われるのである。

(お茶の水女子大学 人間文化研究科)